

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 4 集

1994年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市は、県内でも有数の埋蔵文化財密集地です。なかでも、古志や神門地区には、数多くの遺跡があります。

このたび、古志公民館を移転改築することになりましたが、試掘調査によって、周知の遺跡である古志本郷遺跡に含まれることが明らかになりましたので、発掘調査を実施いたしました。その結果、市内ではじめて完全な形で竪穴式住居跡が検出されるなど、貴重な成果が得られました。

ここに、その成果を記録として残すとともに、今後の埋蔵文化財行政を推進するため活用していきたいと考えています。

本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に、心からお礼申し上げます。

平成 6 年 3 月

出雲市教育委員会

教育長 鐘 築 芳 信

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が平成2年度（1990）に調査した、古志公民館移転改築に伴う古志本郷遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、平成2年（1990）5月23日～平成2年（1990）7月18日まで実施した。
3. 調査体制は、次のとおりである。

調査指導者　田中義昭（鳥根大学教授）
黒谷達典（平田中学校教頭）
片寄義春（出雲教育事務所指導主事）
丹羽野　裕（鳥根県教育庁文化課主事）
調査員　川上　稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）
原俊二（平田市教育委員会）
調査補助員　長見康弘（出雲市総務課）
事務局　山本順一（出雲市教育委員会社会教育課長）

4. 調査にあたっては、地元の方々から多大の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は、原俊二と川上稔が行ったが、図面の一部については、米田美江子氏にお世話になった。
6. 本調査の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管しているが、その一部については出雲文化伝承館に常設展示している。

目　　次

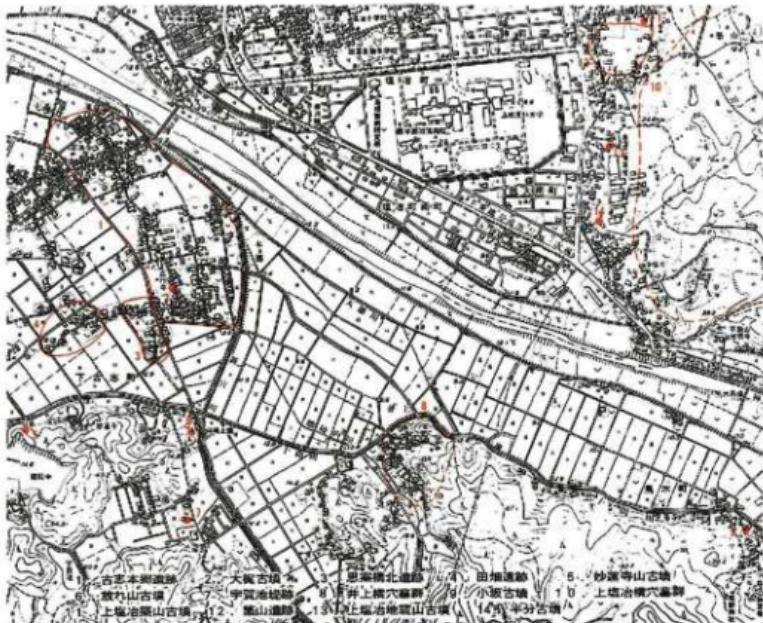
1. 位置と環境	1
2. 調査に至る経緯	3
3. 調査の概要	4
4. 遺構と遺物	7
5. まとめ	24

1. 位置と環境

神戸川左岸に広がる古志地区は、南北に細長い地域の大部分が丘陵におおわれ、神戸川ぞいの僅かの部分が可耕地として、水田や畑地になっている。出雲市街地から、およそ2km南に位置し、北には旧国道が通り、道路に沿って細長い市街地が西に続いている。

この地域は、沖積平野に微高地が発達し、ほとんどが遺跡となっている。また、水田でも遺物を包含するところもあり、南部丘陵の山麓には、古墳や中世山城が点綴している。

古志付近で初めて生活の痕跡が認められるのは、古志本郷遺跡である。古志本郷遺跡は市街地の南に広がる、神戸川によって形成された旧自然堤防上にあり、弥生時代中期からの複合遺跡である。昭和62年の遺跡範囲確認調査のとき、6本のトレントを掘り、土器のほか、竪穴式住居跡と考えられる落ち込みや、貝層の一部を検出しており、遺跡の保存状態が良好であるとともに、矢野遺跡や天神遺跡のような大集落遺跡であることが明らかになった。今回調査した古志公民館移転改築予定地は、遺跡の西端にあり、旧自然堤防脇



第1図 古志本郷遺跡の周辺の遺跡図

の水田である。こうした旧自然堤防から離れた沖積低地にまで遺跡が広がる様相がみられることから、古志本郷遺跡の範囲はさらに広がる可能性が強い。また、同時期の遺跡としては、下古志に田畠遺跡がある。古志本郷遺跡の西方に伸びる旧自然堤防に立地し、市内ではじめて明確な堅穴式住居跡（弥生時代中期）が検出されたほか、石鋸、石鎌などの石製品や黒曜石、めのうなどが出土し、攻玉などの加工を行っていたことが明らかとなっている。さらに、西方には、弥生時代から古墳時代にかけての貝塚としてよく知られている知井宮多聞院遺跡がある。神門水海の汀線付近に営まれたこの遺跡は、これまで何度か発掘調査がなされており、出土遺物の一部は、出雲文化伝承館に展示されている。

古墳時代になると、弥生時代の遺跡に引き続いだ生活が営まれるほか、平野部や山麓に古墳や横穴墓が築造される。沖積平野の旧自然堤防上には、大梶古墳や宝塚古墳、天神原古墳などが築かれている。大梶古墳は、古志本郷遺跡の広がる範囲内にあり、横穴式石室からは金環などが出土している。また、宝塚古墳は、現在周囲は水田だが、築造当時は高燥な旧自然堤防上にあったと考えられ、横穴式石室内に家形石棺をもつ古墳で、国指定史跡となっている。天神原古墳は、出雲西高校の西にあったが、現在は消滅している。南の山麓には、持ち送りの特異な側壁をもち、石床3基を安置した放れ山古墳や、市内最古の横穴式石室に石棺を置き、珍しい石扉をもつ妙蓮寺山古墳がある。また、山腹に穴を穿ちその中に埋葬した井上横穴墓群や地蔵堂横穴墓群などもある。

奈良時代には、これといった遺跡は見当らないが、『出雲國風土記』に記載された「神門都家」が弘法寺付近にあったとの説や、新造院が井上地区にあったとの説もあるが、定かではない。また、「宇賀池」の堤跡と考えられる堤防が残っており、かつて観察できたその断面は、2種類の異なる土を交互に積み重ねた版築状互層になっており、高度な土木技術で築堤されていたことが明らかになっている。

中世には、市内でも10余りの城館があるが、古志付近には、浄土寺山と栗栖山に山城が築かれる。これらは新宮谷沿いにあり、かつて南の山間部から平野にでる通路にあたる要衝の地を選んでいる。これらの城には、郭とよばれる平坦地が何段にもわたってつくられ、出雲守護職となった塙治氏の、頼泰の弟の義信が古志氏として城主におさまり、永くこの地を治めている。

2. 調査に至る経緯

古志公民館が老朽化したため、改築することになり、市道古志新宮線沿いが適地として決定された。現状では水田で、古志本郷遺跡の遺跡範囲ではないが、隣接しており遺跡に含まれる可能性が高かったので、試掘調査を実施した。調査は、5カ所にグリッドを設定し、遺構、遺物の有無について調べた。その結果、全てのグリッドから遺構、遺物が確認されたため、事前に発掘調査を実施することになった。

しかし、出雲健康公園プロジェクトに伴う矢野遺跡の発掘調査も同時に実施しなければならない状況にあったため、調査員の確保がまず問題となつた。そこで、調査員としてお頼いできる人をいろいろさがした末に、平田市教育委員会の原俊二氏にお世話になることになった。

発掘調査は、平成2年5月23日に着手し、同年7月18日に終了した。その間、6月11日に発掘調査の中間報告として、現地で説明会を開催した。また、ほぼ調査が終了した7月7日に、最終的な現地説明会を開催し、多くの人の参加を得た。



3. 調査の概要

発掘調査に先立って、省力化するため、機械による表土掘削を行い、水田耕土20cmを排土した。そして、南北にA～F、東西に1～11の4m四方のグリッドを設定したのち、5月23日から発掘調査に着手した。

調査は、排土の都合上、北側のグリッドから先に着手し、A1～3、B1～3、C1～3を第3層（褐色土）上面まで掘り下げ、プランの確認作業から始めた。そして、順次東及び南に調査を進めていった。

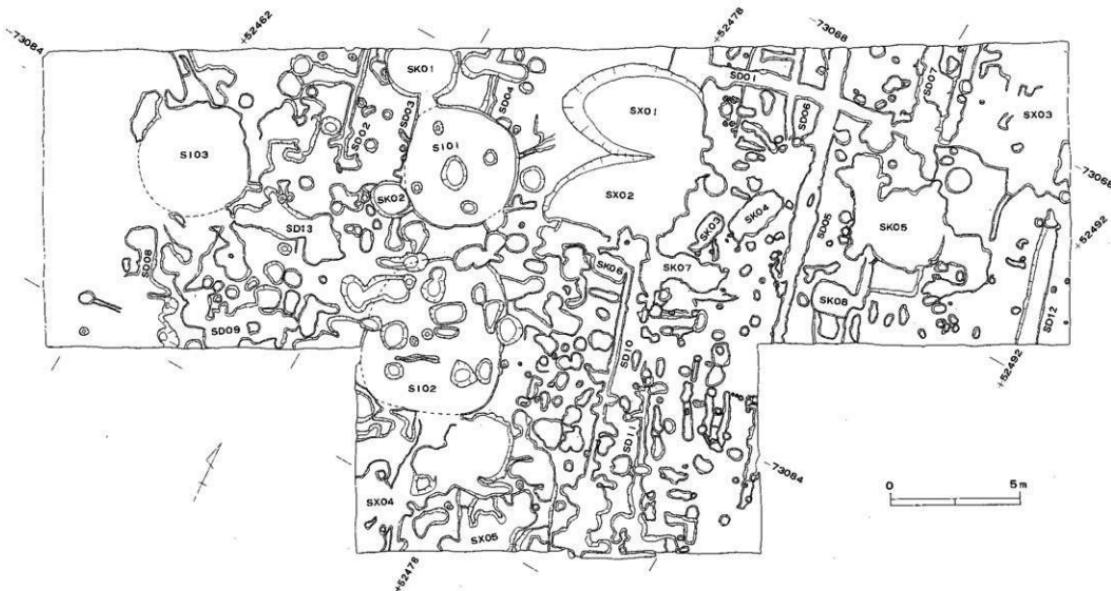
第3層上面では、第2層（淡褐色シルト質土）が落ち込んでいたが、大きな遺構はなく僅かに幅10～20cmの小溝が数条検出されたに過ぎない。これらの溝の中からは、陶磁器が出土しており、近世の遺構である。第2層は、調査区の西側にはあるが、東側ではほとんど認められなかった。

第3層は、土中にオレンジ色の粒子を含んでいるが、西側に比べ東側に多く含まれており、やや明るい色調である。この層は、出土遺物からみて、中世に堆積した上層と考えられ、第4層上面で検出した遺構の多くは調査区の南側に集中し、溝条遺構のほか、上墳、注穴などがある。

第3層の下には、部分的に、北西～南東方向に幅1.5m、長さ6m伸びる、小石を含んだ固く締まった上層がある。この層の下には、弥生時代の竪穴式住居跡があり、古代の道路状の遺構と考えられる。

第4層は、小礫を含んだ黒褐色土で、調査区内の北側に主として堆積しており、本遺跡の中心となる弥生時代中期から古墳時代の遺物を含んでいる。調査区の西側では砂礫層に、東側では黄褐色シルト層を掘り込んで遺構を形成している。検出した主な遺構は、弥生時代の竪穴式住居跡3棟と、数条の溝状遺構で、特に竪穴式住居跡は、下古志田畑遺跡から部分的には検出されたものの、完掘したことは、市内では本調査が初めてであり、貴重な成果といえる。竪穴式住居跡からは、弥生土器のほか、石鋸などの石製品、紡錘車などの土製品とともに、緑色凝灰岩、水晶、青めのう、黒曜石、珪化木などの石材が多量に認められた。

発掘調査は、同年7月18日に終了したが、調査後、遺構実測の省力化を図るため、気球に撮影カメラを搭載して、空中写真測量を行い、現地調査の全てを終えた。



第3図 遺構図

4. 遺構と遺物

本調査によって検出した遺構は、弥生時代の竪穴式住居跡3棟のほか、古代の道路状遺構、弥生時代以降の多数の土壙や落ち込み状遺構、溝状遺構、柱穴があり、調査区の全域にわたり広がっている。調査区の北側は、弥生時代の遺構が多く、南側には中世のピットを数多く検出している。調査地は現状の地盤は水田であるが、旧自然堤防状地形の端部にあたり、これより西は沖積低地に移行する。

出土遺物としては、SI-01、SI-02から、各種の石製品や石材が出土したのをはじめ、各種遺構から遺物が豊富に出土している。

SI-01 (第4図)

調査区中央北寄りに検出した竪穴式住居跡で、SI-2のすぐ北に位置している。調査区で検出された3棟の住居跡のうち、最も保存状態が良く、西壁面の一部が近世の溝によつて削られているほかは、ほぼ原形を保っている。

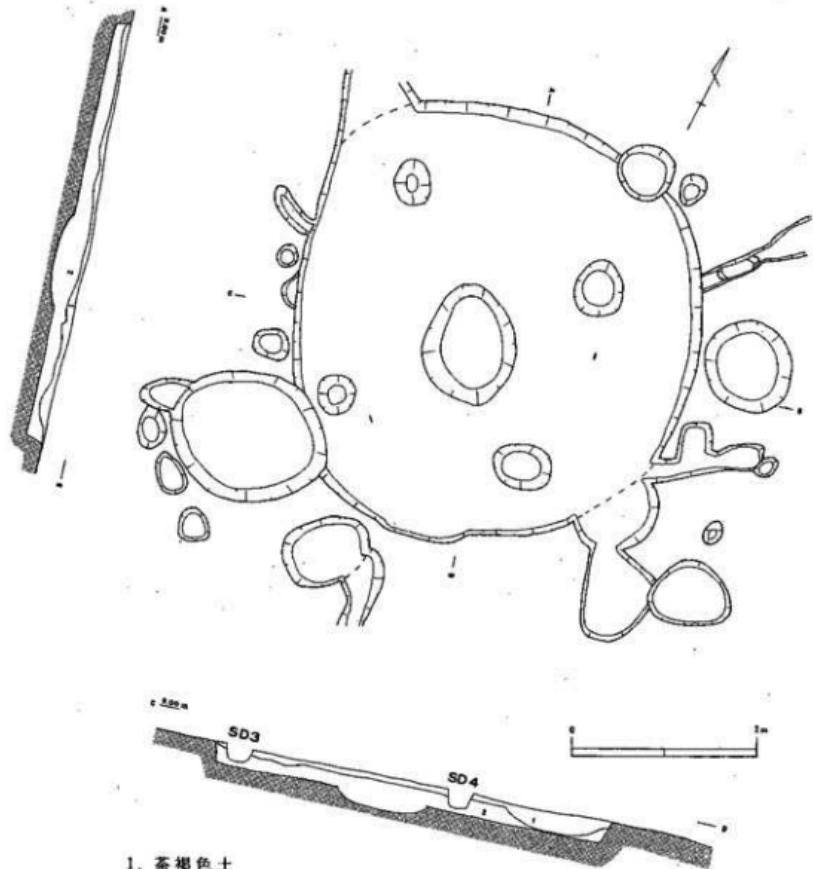
住居跡は、南北4.8m、東西4.4mのほぼ円形を呈し、砂礫層を0.2m掘り込んでいる。床面には、主柱穴4と中央ピットがあり、主柱穴は、上面の径0.4~0.6m、深さ0.1m~0.2mのやや浅いピットであるが、中央ピットは主柱穴よりもひとまわり大きく、径1.0m×1.3mで、深さ0.16mを測る。柱穴間の距離は、ほぼ同じで、2.2m~2.4mである。床面には特に貼床の跡はない、ほぼ平坦で、床面の標高は約8.5mである。現状では、周囲が水田ということもあって、地下水が浸透して床面は冠水する。壁面の下には周溝はない。

SI-01 出土遺物 (第5図、第6図)

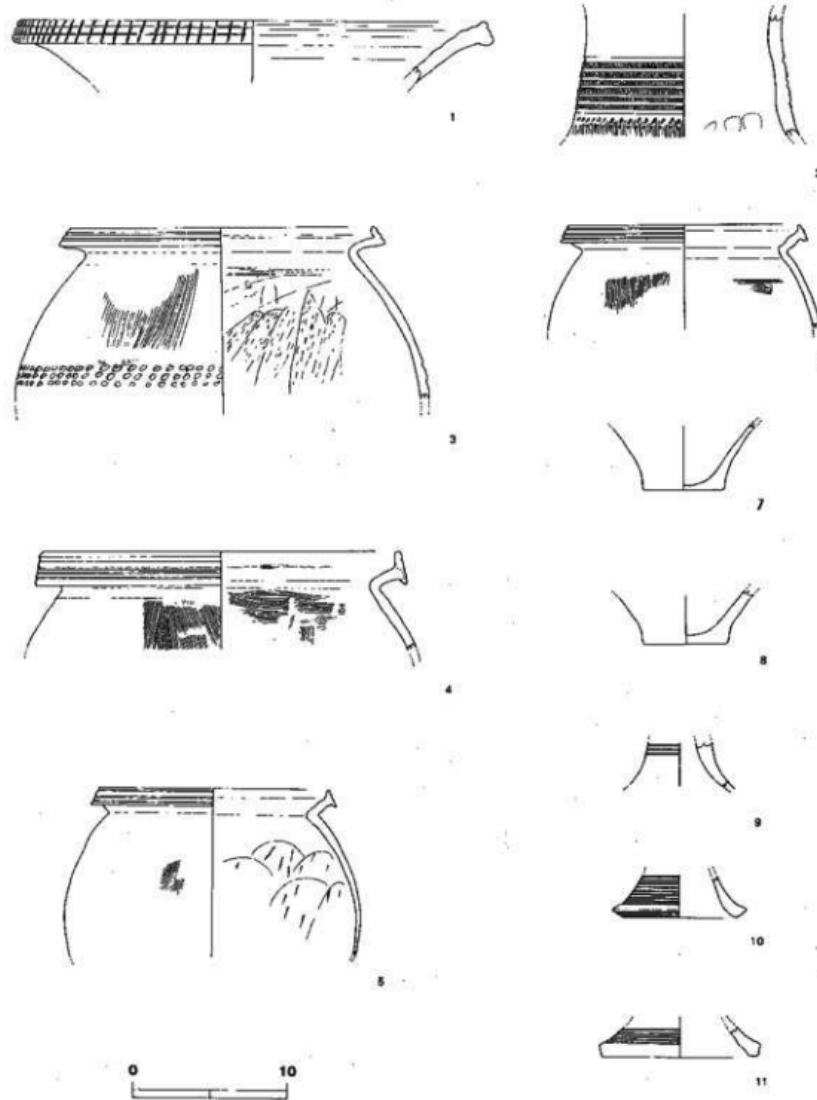
出土遺物としては、弥生土器のほか、グリーンタフ5点、青メノウ1点、水晶1点、黒曜石1点などがあった。遺物は、中央ピットの北側から1.2×8cmの河原石1点が出土したほかは、中央部付近からの遺物の出土はない。住居跡の周縁部から出土し、特に、北西部と南西部に遺物が多い。土器以外では、青メノウと黒曜石が、住居内の北側中央の床面から、また水晶は西側中央から出土し、グリーンタフは北側と東側に多く認められた。

この住居跡の周縁には、関連するピットがいくつかあり、弥生土器のほかにグリーンタフと赤メノウ、加工痕のある軽石などが出土している。

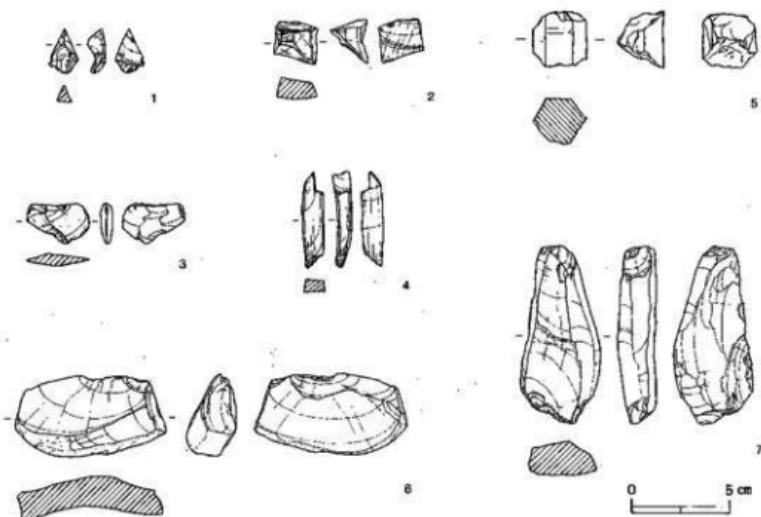
弥生土器には、壺、甕、高杯の器種があるが、甕が最も多い。1は、口縁端部に2条の凹線文を入れ、さらに斜線を施している広口壺である。2は、頸部から胴上部にかけての広口壺で、外面は細かいタテ方向のハケメ調整をしたのち、頸部下半に7条の沈線による



第4図 SI-01 遺構実測図



第5図 SI-01 出土遺物実測図(1)



第6図 S I - 01 出土遺物実測図(2)

直線文を施し、その下には、刺突による列点文を配している。また、内面には指頭圧痕がある。3～6は甕で、3は上方に拡張した口縁端部に2条の凹線文、外面胴部上半に列点文を施し、内面は頸部よりやや下がった位置から下に、ヘラケズリを施している。また、外面にはかなりのススが付着し、黒くなっている。4はやや幅広の口縁端部に4条の凹線文をもち、胴部外面には細かいタテ方向のハケメ、内面にはヨコ方向のハケメを施している。5は口縁端部に3条の凹線文、胴部外面には細かいタテ方向のハケメ、内面には頸部よりやや下がった位置から下に、ヘラケズリを施している。6は口縁端部に3条の凹線文、胴部外面には細かいタテ方向のハケメ、内面にはヨコ方向のハケメが少し残っている。7と8は甕の半底の底部で、最大径が胴部の上のほうにあり、細くすぼまるものである。9～11は高坏で、9が脚上部で、沈線による多条の直線文を施している。10は脚下部に直線文を施し、脚端部に2条の凹線がある。11は脚下部に直線文を施しているが脚端部は施していない。

土器のほかでは、石材片がある。グリーンタフは5点出土し、量的には最も多い。このうち6と7が最も大きく、長さは10cmである。1は黒曜石、2は不明、5は水晶、それ以外がグリーンタフである。

S I - 0 2 (第7図)

調査区中央で検出された住居跡で、S I - 0 1 の南壁から 1. 1 m 離れている。南側と西北側で擾乱を受けているが、3棟のなかでは最も大きな住居で、床面積は約 30 m²もある。

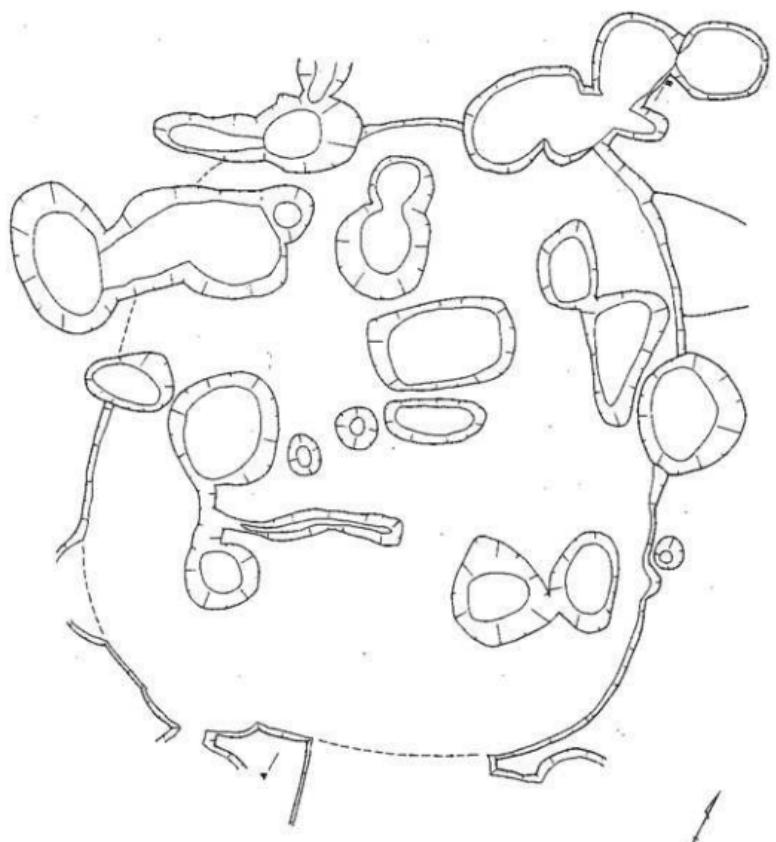
住居跡は、東西 5. 4 m、南北 6 m の隅丸方形を呈し、ほぼ南北方向に主軸がある。壁は基盤の砂礫層を掘り下げ、現状で 0. 15 m 立ち上がっている。床面には数多くのピットを検出したが、住居跡にかかわるものうち、主柱穴 4 と中央ピットが認められた。主柱穴は、上面の径 0. 5 ~ 1. 0 m、深さ 0. 15 ~ 0. 2 m で、S I - 0 1 と比べると住居の規模が大きいだけは柱跡もひとまわり大きい。中央ピットは、1. 4 × 0. 8 m、深さ 0. 2 m で長方形を呈する。柱穴間の距離は、南北が 3. 4 m、東西が 2. 7 m で、これらの柱穴に囲まれた中央やや北寄りに中央ピットがある。床面には床を貼った痕跡はなく、東側より西側がやや高い。壁面の下には周溝らしき浅い溝状の落ち込みが東側でみられたが判然とはしなかった。

S I - 0 2 出土遺物 (第8図、第9図)

出土遺物としては、弥生土器のほか、石棒状石製品、石鋸などの石製品、紡錘車などの土製品、グリーンタフや珪化木などが多量に出土した。遺物のほとんどは、住居の東側から出土しており、特に南東部の P 4 付近に集中している。その周辺からは、弥生土器のほか、石鋸 1 点、土製品 1 点、グリーンタフ 7 点、珪化木 4 点、水晶 1 点、玉髓 1 点が出土しており、攻玉がなされた可能性があるが、チップは見当たらなかった。

弥生土器には、壺、甕、高杯があり、量的には甕が多い。1 ~ 3 は甕で、1 は、拡張した口縁端部に 3 条の凹線文を入れ、外面の頸部には貼付突帶をもち、指頭または刺突具による圧痕跡を施している。体部内面の頸部のすぐ下にはヨコ方面的ハケメ、さらにその下はヘラケズリによる調整をしている。2 は、口径 21 cm の甕で、拡張した口縁端部に 4 条の凹線文を入れ、外面には細かなタテ方向のハケメが僅かに残っている。3 は、2 よりや小さく、拡張した口縁端部に 2 条の凹線文を入れ、外面は細かなタテ方向のハケメで調整している。4 は、壺の底部で、底径は 12 cm を測り、外に大きく開くようにして立ち上がっている。5 は、底径 12 cm の高杯の脚部で、拡張した脚端部に凹線 2 条を入れ、さらにその脚下部には、クシ状工具による 9 条の沈線で飾られている。

土器以外の遺物としては、そのほとんどが石製品をはじめ、それらの剥片である。明らかな石製品としては、石鋸、石棒状石製品など 3 点がある。1 は、石鋸で、刃部を研ぎ出しているほか、薄い板状の表裏を研磨している。この住居跡からは、チップは発見できな

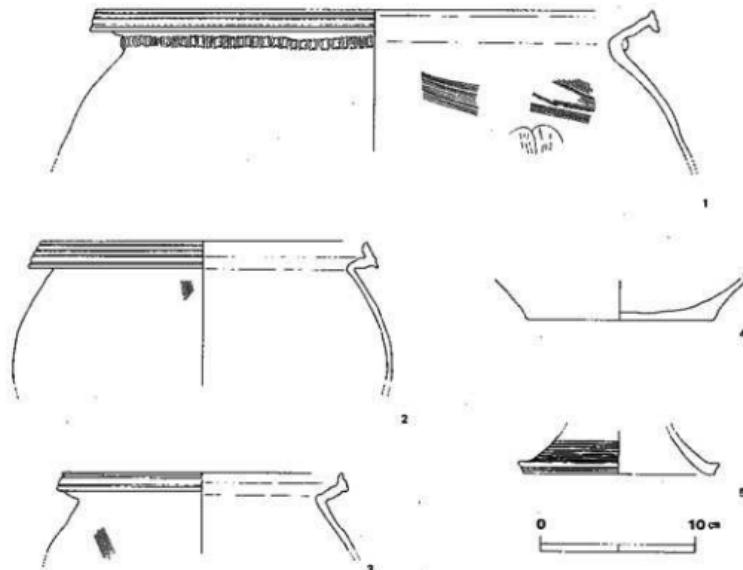


0.00m

0 2m

第7図 SI-02 遺構実測図

かったものの、グリーンタフの剥片をはじめ珪化木、玉髓、水晶、黒曜石などがかなり出土していることからみて、適当な大きさを得るために擦り切り用として使用されたと考えられる。2は、グリーンタフ製の石棒状石製品である。長さは9cmで、端部は平坦ではないが、カットした加工痕があることから、一応の完成品と考えられる。先端から1cmのところに、幅2mm、深さ1mmの環状に切り込みが繰り返しており、縄文時代にみられる石棒や中世にみられる木製品の腸物と形態的に酷似している。全体的には打ち欠けているところも多く表面に凹凸があるが、部分的に磨いたような擦り痕が残っていることからみて、本来は綺麗に磨研されていたことが窺える。4は、半欠品で、先端が細まった一方の端部を加工し、刃のように研ぎ出している。石材は不明だが、砂岩質でやや柔らかく加工しやすい材質である。類例がなく、用途は不明であるが、石棒状石製品と同様に、祭祀に使用する目的でつくられた可能性はある。5～9は剥片などで、5は黒曜石、6は玉髓、7はグリーンタフ、8は水晶、9は珪化木である。なかでも、グリーンタフは20点近く出土しており、特に多いが、製品としては石棒状石製品しか出土していない。その他には、土製品も認められ、3は土器片を再使用した紡錘車で、内外面には、使用の際につけた擦り痕がみられる。



第8図 SI-02 山土遺物実測図(1)



第9図 SI-02 出土遺物実測図(2)

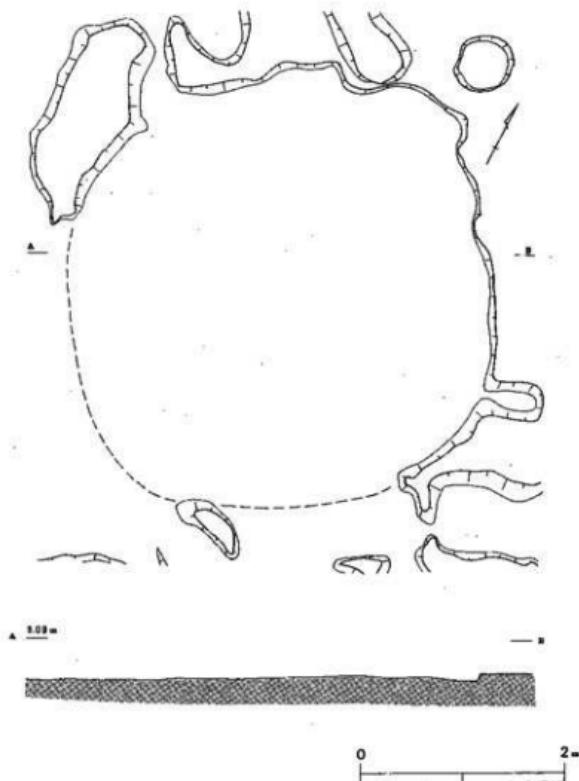
S I - 0 3 (第10図)

調査区の北西部で検出した竪穴式住居跡である。S I - 0 1 の西方 6 m にあるが、保存状態が悪く、北側と東側の壁面しか残っていない。

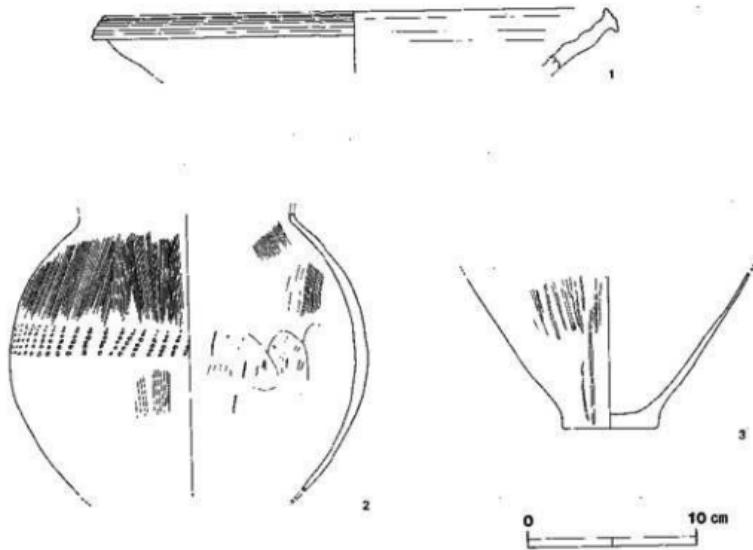
住居跡は、径約 4 m の円形住居で、床面は砂礫層まで掘り込んでいる。壁面は、現状で 0. 1 m 立ち上がっている。柱穴は確認できなかった。この住居跡の上層には、古代の道状遺構がある。

S I - 0 3 出土遺物 (第11図)

出土遺物としては、弥生土器の壺と甕がある。1 は、大きく外反した口縁部の拡張した端部に凹線文を入れた広口壺である。2 は、甕で、外面の肩部にタテ方向のハケメ、その



第10図 S I - 0 3 遺構実測図

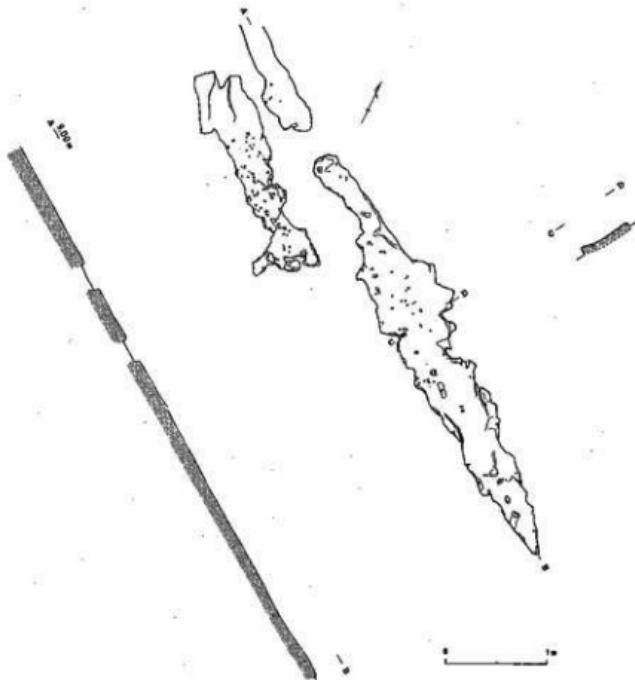


第11図 SI-03 出土遺物実測図

下に連続刺突文を施し、体部下半はハケ調整のち、ヘラミガキを施している。また内面は、頸部下にハケメ、胴下半にはヘラケズリで調整している。3は、外面のみタテ方向のヘラミガキをおこなった壺の底部である。

SC-01 (第12図)

調査区の西端、A2グリッドで検出された遺構で、SI-03の上層から検出されている。検出した遺構は道路と推定され、N-55°-Wの方向軸で調査区外から南東に伸びており、調査区内で確認できた長さは5、8mである。北端は調査区外に伸びているので明らかではないが、調査区内での北端よりも南端が0.1m高く、南にいくにしたがって先細りになっていることからみても、ある時期に削られて消失したと考えられる。確認できた最大幅は1.3mであるが、西側にもう少し広がる可能性もある。砂と小石と土が、かなり踏み固められたようになっており、その表面は、中央が少し凹んでいる。固く締まった層の厚さは約7cmで、上層には中世の遺物を含む層、下層にはSI-03の埋土になっている点からみて、古代の一時期の遺構と考えられる。この遺構に伴う遺物は出土していない。



第12図 SC-01 遺構実測図

SD-01

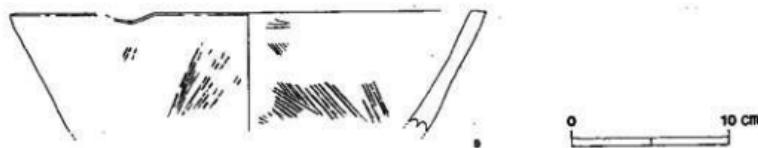
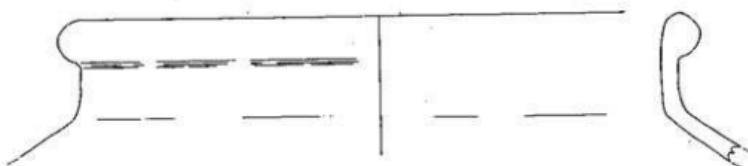
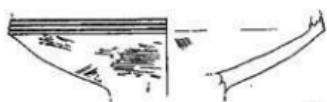
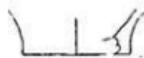
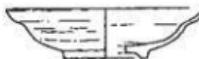
調査区の北端を、A3からA9まで、ほぼ東西方向に約25m伸びる溝である。調査区内には、十数条の溝状遺構が検出されているが、そのなかでも最も規模が大きい遺構である。溝の上幅は0.5~0.8m、下底幅は0.3~0.6mを測り、深さは0.15~0.2mである。溝内には、上層にIV層（褐色土）、下層にV層（黒褐色土）が堆積し、下層からは弥生土器が数点出土しているが、すべて細片で、遺物はきわめて少ない。

A3でピット、A4でSD4とSK01、A5でピットとSD4、A6でSX01、A7でSD14、A8でSD5とSD6、A9でSD7と複合し、全ての遺構に切られており、調査区内では、最も古い遺構である。

SD-01出土遺物（第13図-1、2）

1は、拡張した口縁部に4条の凹線を施し、2は、甕の底部である。

SD-02・03・04



第13図 SD・SK 出土 遺物 実測図

この3条の溝状遺構は、調査区内で確認された長さは異なるものの、伸びる方向や、規模が同質のものである。SD-02・03・04の溝間距離は約2.2mで、SD-02は、上幅0.3m、深さ0.13mで、北の調査区外から約5m伸びて消失している。溝内からは、遺物は出土していない。SD-03は、溝の上幅や深さはSD-02とほぼ同じだが、北の調査区外から約14m検出し、南の調査区外にさらに伸びている。SK-01、SI-01、SD-02を切っている溝状遺構で、溝内からは、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器の細片が少量出土している。SD-04は、A5付近の調査区外から南へ20m伸びてさらに調査区外に伸びている。SD-01、SI-01、SD-02を切っている溝状遺構で、溝内からは、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器の細片が少量出土しており、南端のE4付近からは唐津小皿が出土している。これら3条の溝は、中世～近世の溝と考えられ、小規模であるが、性格は不明である。

SD-04 出土遺物（第13図-3）

E4の溝内から出土した唐津小皿で、底部に高台がつき、体部の中ほどで内側に屈曲して段を持つ。底部と、その上部1cmを除き、内外面に施釉している。

SD-05

調査区で検出した溝条遺構のなかでは、SD-01とともに最も規模が大きい。溝の上幅0.4~1.0m、下底幅0.3~0.8m、深さ0.15mで、下底のレベルは南端8.7m、北端8.6mで、やや南側が高くなっている。溝は、北の調査区外からほぼ南北方向に18m伸び、E7付近で消失している。溝は、A8付近でSD-01を切っているが、溝内からは、弥生時代中期後半の特長をもつ高壙などが下層から出土しているので竪穴式住居跡とほぼ同時期と考えられる。

SD-05 出土遺物（第13図-4、5、6）

4は、口縁端部に凹線文を施し、浅く内きゅうする高壙の壙部で、壙部外面にヨコ方向のヘラミガキを施している。5は、高壙の細長い脚上部に多条の凹線を廻らしている。6は、拡張した口縁端部に凹線をもつ壙であるが、かなり摩滅している。

SD-06・07

SD-05の西側にSD-06、東側にSD-07を検出している。SD-06は、A8付近の調査区外から約4m伸びた、溝の上幅0.4mの小溝であり、遺物は出土していない。SD-07は、上幅1.4m、深さ0.2mのやや幅広い溝だが、調査区内では6m確認している。遺物としては、細片のみのため時期が確定できないが、いずれもSD-01を切っている。

SD-08・09

調査区の西端、C2付近で検出された溝であるが、SD-09はピットが重なった可能性もある。SD-08からは、伊万里や唐津などの陶磁器の細片が少し出土しているので中世以降の遺構と考えられるが、規模は明瞭ではない。SD-09からは、土師質土器片が少量出土している。

SD-10・11

SD-2・3・4とはほぼ同方向、同規模の溝状遺構で、南の調査区外から、SD-10が1.2m、SD-11が7m調査区内に伸びている。遺物は、SD-11から須恵質の甕が出土している。

SD-12

調査区の東端、C10で5m確認した上幅0.8m、深さ0.1mの浅い溝であるが、南の調査区外に伸びている。

SD-13

B3付近を東西方向に伸びる溝であるが、他のピットと切り合っている。溝内からは、土師質土器片のほか、弥生土器も出土しているが、溝の下底から古備前片と古銭が出土しており、中世の溝と考えられる。

SD-13 出土遺物（第13図-7、8）

7は土師質土器の小皿底部で、回転糸切り痕が僅かに確認できるが、かなり摩滅している。8は、口縁が玉縁の古備前の甕で、室町前半と考えられる。そのほかには、かなり摩滅していて判読し難いが、開元通宝と考えられる古銭が、溝の下底から出土している。

SK-01

A4で検出した土壤で、SI-02を切り、また、SD-03によって切られている。径2.8m、深さ0.25mであるが、北側は調査区からはずれている。出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器があるが、ほとんどが土師質土器で、土壤のなかでは最も遺物が多かった。中世の遺構と考えられるが、性格は不明である。

SK-01 出土遺物（第13図-9）

9は、在地産と考えられる上師質の片口擂鉢で、外面は粗いハケメで調整し、内面には擂目を入れている。

SK-02

SI-02と重なる土壤で、長径1.8m、短径1.4mの東西に長く、0.55mの深さがある。土壤の上層からは土師質土器、下層からは弥生土器が出土している。

SK-03・04

B7で並ぶようにして検出された土壌で、大きさの割りには浅く、0.05~0.15mしかない。遺物は全く出土しておらず、遺構の性格は不明である。

SK-05

試掘調査のときに、確認されていた遺構で、当初は竪穴式住居跡の一部と考えていたが本調査で土壌であることがわかったものである。調査区の東端のB9で検出された遺構で径3m、深さ0.3mの規模の大きな土壌で、シルト層下の砂疊層まで掘り込んでいる。内部には黒褐色土の下に、軟らかく粒子の細かい黒色土が堆積しており、遺物としては、弥生土器の細片が出土した程度で少なく、遺構の性格は不明である。

SK-06

SX-02の南側に検出した長径1.5m、短径0.9m、深さ0.1mの浅い土壌である。遺物は出土していない。

SK-07

C7で検出した長径2.2m、短径1.2m、深さ0.2mの浅い土壌である。遺物は出土していない。

SK-08

C8で検出した長径1.6m、短径1.2m、深さ0.15mの浅い土壌である。遺物は出土していない。

SX-01・SX-02

SI-01の東側で検出した大きな落ち込み状遺構で、切り合い関係は認めることができなかった。どちらも遺物はかなり少なく、土師質土器の壺や備前の破片が出土したに過ぎず、遺構の性格は不明である。

SX-03

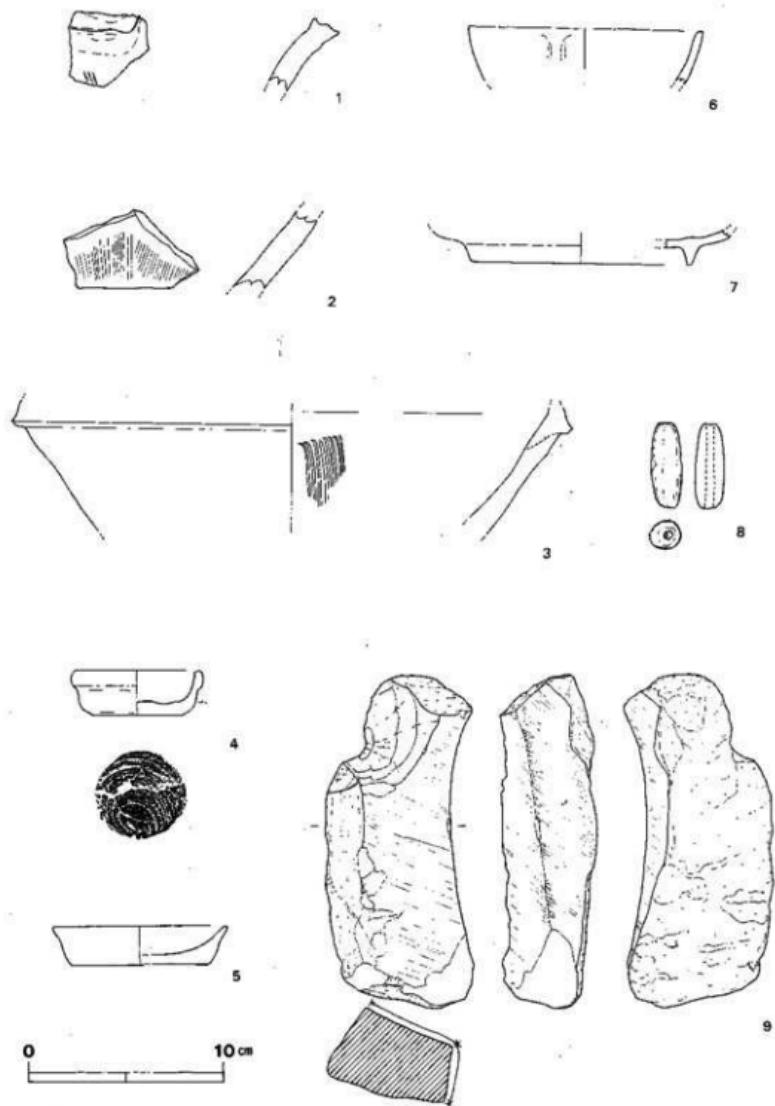
調査区の東端で検出した大きな落ち込み状遺構であるが、浅いうえに、かなり攢乱を受けている。

SX-04・SX-05

調査区の南端で検出した落ち込み状遺構である。ピットや溝状遺構との切り合い関係が識別できなかったが、ピットなどが複数重なっている可能性もある。遺物としては、05から、近世の唐津と、磁石が一点出土している。

その他の遺物（第14図）

包含層やピット内から、弥生土器、陶磁器、土師質土器、土製品、石製品、古銭などが



第14図 その他の出土遺物

出土している。

中世以降の遺構は、主に調査区の南側に多く、その時期の遺物も、当然ながら南側に多いが、調査区の全域から出土している。

陶磁器では、青磁や唐津系陶器、備前系陶器などがある。1は、SX-03の攢乱層から出土した備前播鉢の片口部で、口縁端部はほぼ平坦になっている。13世紀末から14世紀の比較的古い時期のものと考えられる。2は、土師質のこね鉢で、外面にタテ方向のハケメを施している。3は、B8の3層から出土した備前播鉢の口縁部で、内面には8条を一単位とする擗目を施している。4と5は、土師質土器の小皿で、4の底部には回転糸切り痕が残っている。青磁は5片出土しているが、6は碗で、不明瞭ながらも蓮弁の一部が認められる。7は、高台の付いた皿と考えられる青磁底部片で、室町時代と考えられる。8は、A6の4層から出土した長さ4.3mの管状土錐である。9は長さ17cmの砥石で、2面が砥面として使用されている。

5. ま と め

古志本郷遺跡は、昭和62年、古志地区遺跡分布調査に伴う古志本郷遺跡範囲確認発掘調査によって、遺跡の性格が概ね明らかになり、弥生中期にまで溯ることが明らかになっている。今回の調査地点は、古志本郷遺跡の西端にあたり、東側の安定した旧自然堤防にさらに集落が広がっていることが考えられる。

今回の調査で最大の成果は、これまで矢野遺跡や田畠遺跡で竪穴住居の一部は検出されたが、今回市内ではじめて竪穴住居跡が完全な形で確認されたことである。竪穴住居跡は3軒が検出されたが、SI-01が比較的の遺存状態が良好であった。径4.7mの円形を呈し、内部に4本の主柱穴のほか大きな中央ピットを配していたが、他の2軒は後世の擾乱によりあまり明瞭とはいえない、特にSI-03はかなり原形を損なわれている。SI-01の住居の構造は、同時期（弥生時代中期後半）の安来市の越峰遺跡⁽¹⁾で検出されたSI-02や、松江市の勝負遺跡⁽²⁾で検出された中期後半～後期のSI-01・02とよく似ているが、古志本郷遺跡で検出したSI-02のような隅丸長方形の住居も同時存在していることからみても、住居の平面プランが、必ずしも時期によって齊一性があるとは限らないことが窺われる。

また、竪穴住居で確認された石製品や石材も注目される。その多くはグリーンタフ（緑色凝灰岩）の剥片であるが、製品としては祭祀に用いられた可能性のある石棒状石製品があるほか、黒曜石、青めのう、水晶、玉髓、珪化木などのさまざまな石材がそう多くはないが出土している。擦り切りに使用したと考えられる石鋸も出土していることから、明らかな製品はないものの、玉作が行われていた可能性がある。このことは、めのうを多く出土した下古志田畠遺跡の竪穴住居にもいえるほか、矢野遺跡第3地点の発掘調査でも、緑色凝灰岩と水晶の玉未製品などが認められている。⁽³⁾ そうしてみると、出雲平野の弥生時代中期頃には、集落のそれぞれの住居で、他の石製品とともに小規模な玉生産を行っていた可能性も考えられる。

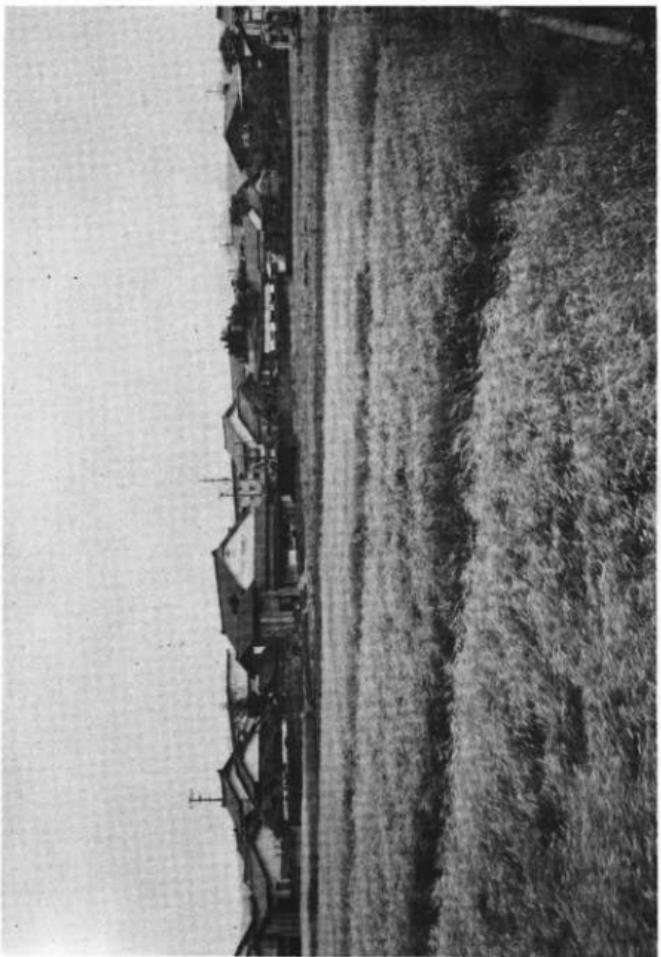
弥生時代の遺構、遺物のほかに、古代の道路の可能性のある遺構も検出されているが、類例の少ない遺構といえる。

註 (1) 島根県教育委員会『一般国道9号（安来道路）埋蔵文化財発掘調査報告書IV』（1993）

(2) 島根県教育委員会『一般国道9号（松江道路）埋蔵文化財発掘調査報告書IX』（1992）

(3) 田中義昭ほか『古代出雲文化の展開に関する総合的研究』

調査地近景（北から）



発掘調査区全景（調査後）





グリッド調査状況



SI-01 調査状況（北から）



SI-01 遺構（北から）



S I - 0 2 遺構（北から）



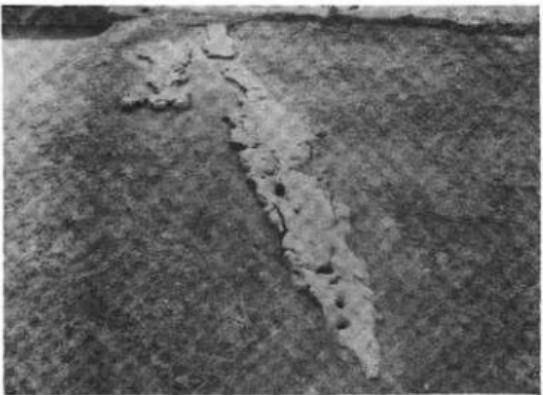
S I - 0 2 遺物出土状況



S I - 0 3 遺構（北から）
（東側に重なっているのは
溝状遺構）



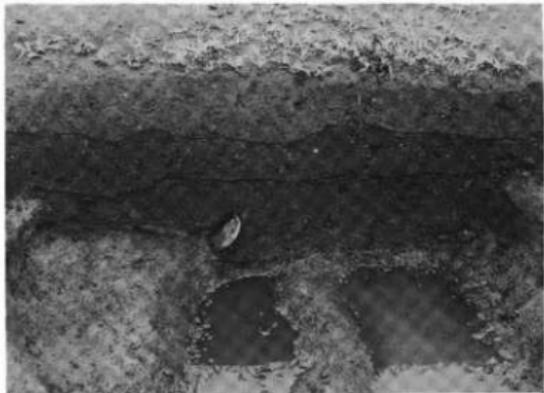
SC-01 調査風景



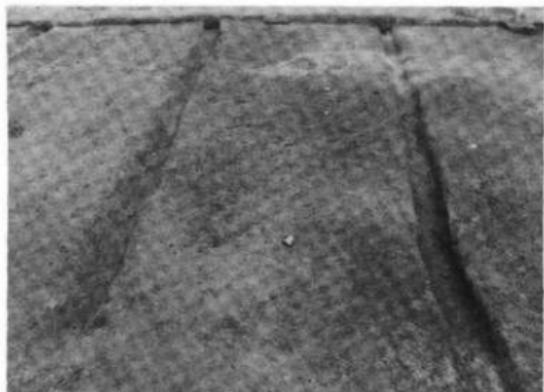
SC-01 造構 (南から)



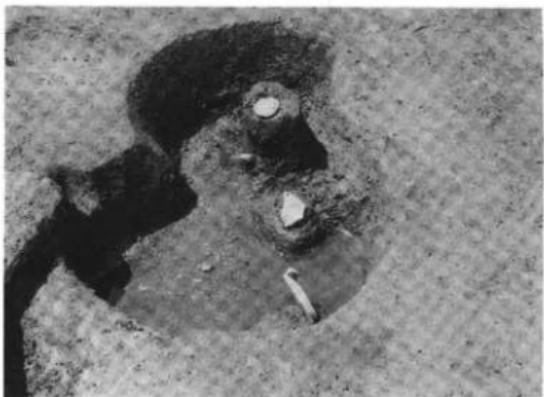
東側溝状造構群 (01・05・06)



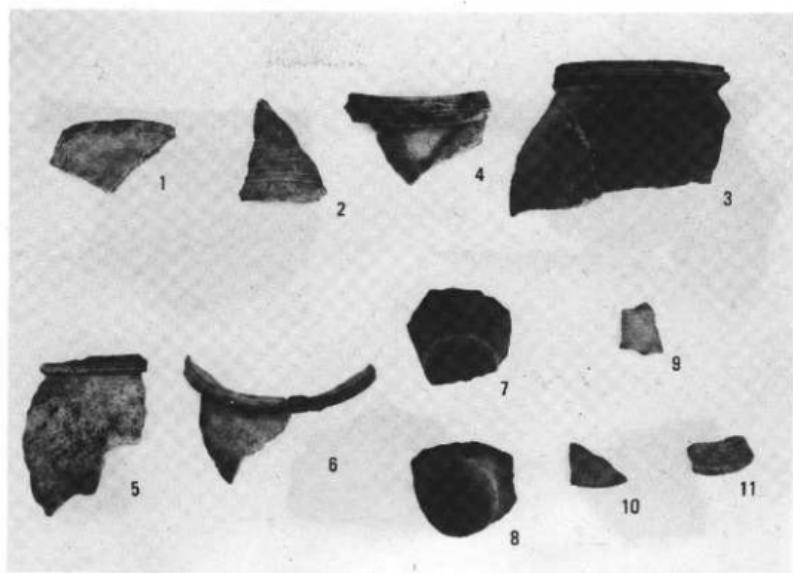
SD-05 セクション



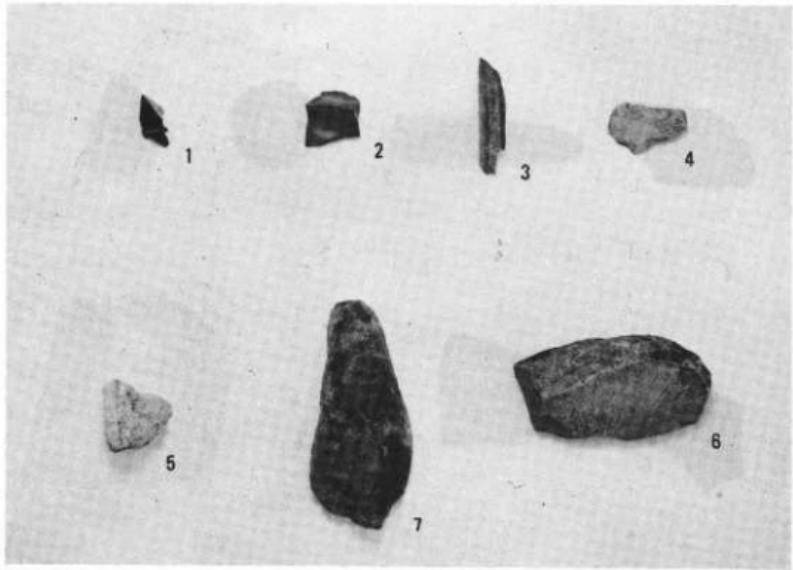
SD-03・04 遺構（南から）



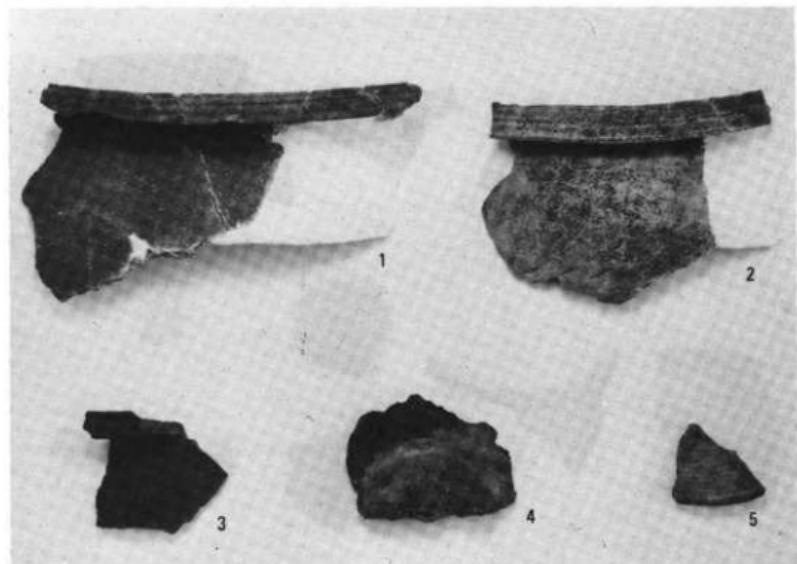
ピット調査状況



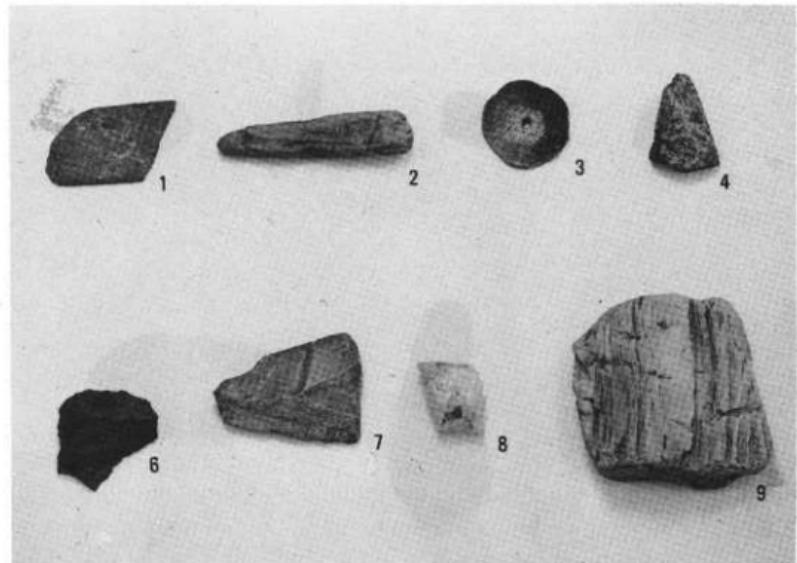
S I - 01 出土遺物 (1)



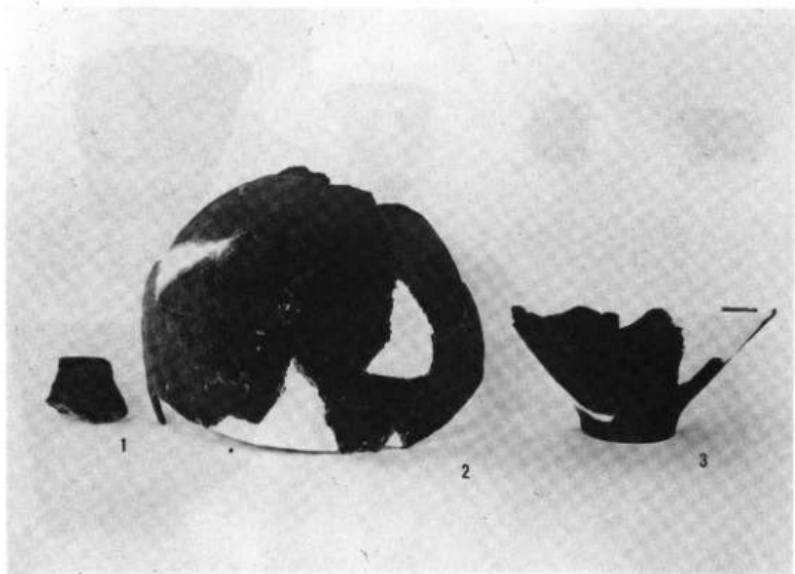
S I - 01 出土遺物 (2)



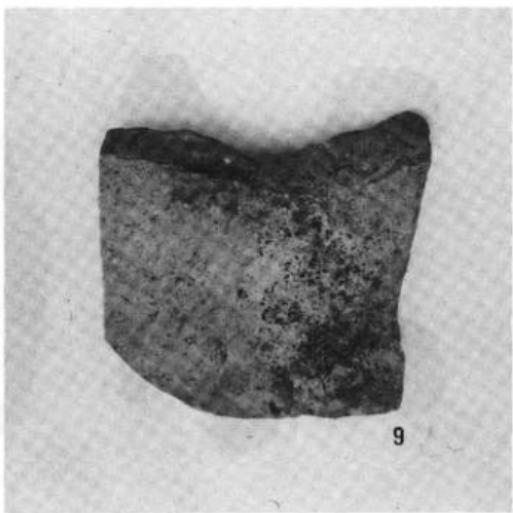
SI-02 出土遺物(1)



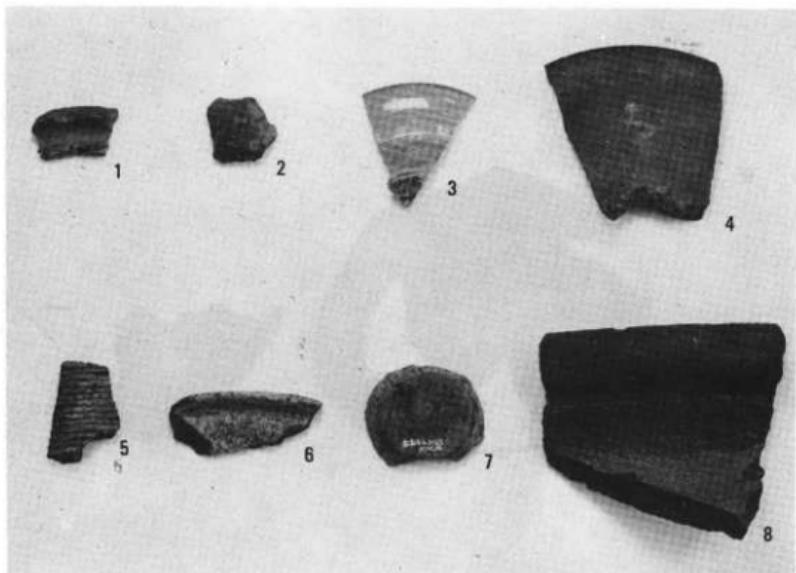
SI-02 出土遺物(2)



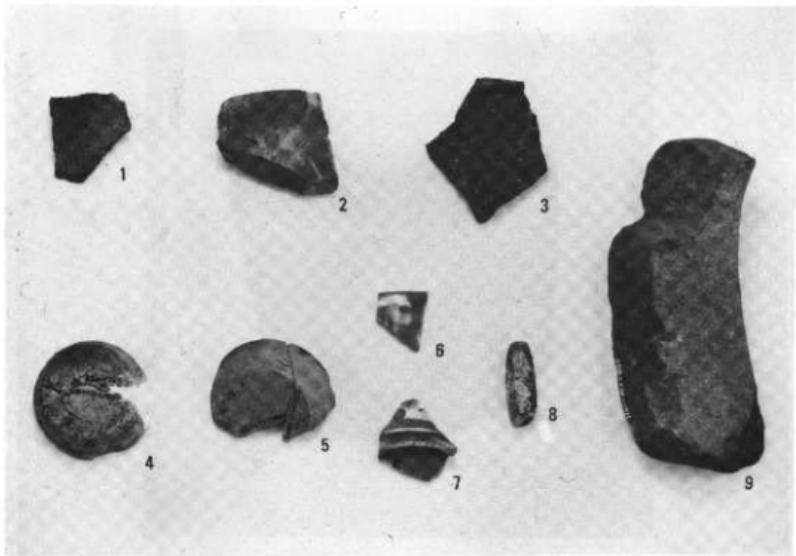
SI-03 出土遺物



SK 出土遺物



SD 出土 遺 物



そ の 他 の 出 土 遺 物

平成6年(1994)3月25日 印刷
平成6年(1994)3月28日 発行

**出雲市埋蔵文化財調査報告書
第4集**

発行 出雲市教育委員会
印刷 池尻プリント社